

プレスリリース
報道関係者各位

笹川ハンセン病イニシアチブ

2025 年 1 月 25 日

世界ハンセン病の日：インドネシアのハンセン病対策を強化へ

笹川陽平 WHO ハンセン病制圧大使、インドネシアでの新たな取り組みを表明

2025 年 1 月 26 日の「世界ハンセン病の日」にあたり、笹川陽平 WHO ハンセン病制圧大使（日本財団会長）は、インドネシアにおけるハンセン病への偏見と差別の撤廃と早期診断・早期治療の実現に向けた支援を強化することを発表しました。

ハンセン病は、聖書にも登場するほど古い病気で、長い間その原因が解明されていませんでした。かつては遺伝病や神の罰と誤解されていましたが、実際にはらい菌による感染症であり、その感染力は非常に弱いものです。1981 年に WHO が推奨した多剤併用療法（MDT）により、ハンセン病は治る病気となり、世界で 1800 万人以上が治癒しました。しかし、現在も毎年約 20 万人が新たに診断を受け、多くの患者・回復者やその家族までもが古い固定観念や迷信に基づく偏見や差別に直面しています。さらに、患者数の減少とともに医療従事者の専門知識が失われつつあり、必要な医療が届かない問題も深刻化しています。

インドネシアは、インド、ブラジルに次いで、世界で 3 番目にハンセン病の患者数が多い国です。2023 年には 14,376 人が新規診断され、そのうち 1,179 人が子どもでした。さらに、子ども 21 人を含む 826 人が診断時に既に目に見える障害を負っており、これは診断の治療の遅れを意味します。

笹川陽平 WHO ハンセン病制圧大使は、「インドネシアはハンセン病対策において最も重要な国の一つです。この国で偏見と差別を克服し、早期診断・治療を促進することは、世界のハンセン病ゼロの流れを加速させるカギとなります。」と述べ、笹川ハンセン病イニシアチブが 2025 年を皮切りにインドネシアで集中的な支援を行う方針を示しました。

ハンセン病当事者団体ベルマタ・インドネシアの会長、アル・カドリ氏は次のように語ります。「ハンセン病は治療可能な病気です。適切に治療を受ければ、障害を防ぐことができます。しかし、偏見や差別への恐れから、多くの人が診断・治療を受けない

ままになっています。」

また、ブディ・グナディ・サディキン保健大臣も、インドネシアは世界のハンセン病問題解決の最前線に立っているとし、早期診断・早期治療を促進するため、ハンセン病に関する正確な知識を広める啓発活動を展開し、政府、医療従事者、市民社会が団結することを呼びかけています。

今後、ハンセン病イニシアチブは、政府、当事者団体、メディア、NGO らと連携し、インドネシアでの「ハンセン病ゼロ」の実現に向けて、モデル事業を立ち上げます。

笹川陽平 WHO ハンセン病制圧大使について

笹川陽平氏はアジア最大のフィランソロピー団体である日本財団の会長として、アジア、アフリカ、南米などにおける課題解決に注力しています。半世紀以上にわたり、ハンセン病制圧活動を続け、2001 年から WHO ハンセン病制圧大使、2007 年からは日本政府ハンセン病人権啓発大使を務めています。

笹川ハンセン病イニシアチブについて

笹川ハンセン病イニシアチブは、笹川陽平 WHO ハンセン病制圧大使と笹川保健財団および日本財団のハンセン病のない世界の実現を目指す戦略的アライアンスです。

1975 年から WHO を通じて各国政府のハンセン病対策を支援し、その累計は約 2 億ドルに上ります。また、社会面では、ハンセン病当事者団体の支援や、国連での差別撤廃決議の採択に大きく貢献しています。

本件に関するお問い合わせ先：

笹川ハンセン病イニシアチブ 広報担当 三賀知恵美

Email: c_sanga@shf.or.jp

Tel: +81-070-4509-4213